

板倉遺跡の再評価

—出土遺物・遺跡立地を中心に—

川添和暁・鬼頭 剛

尾張低地帯では、縄文時代後期・晚期の遺跡の状況が、近年注目されつつある。本稿では、これまで考古学的に検討がなされてこなかった、板倉遺跡について若干の検討を試みた。当遺跡は、板倉貝塚として、縄文海進時の海岸線の範囲など自然地理学の立場からの発言が多いものである。本稿は、現在、遺物として確認できる土器片、および遺跡周辺の堆積状況などから、板倉遺跡の評価を行ったものである。地質学的検討から谷地形などの表層地形の解析を行なった上で、見つかったとされる貝層は、縄文海進による中部粘土層由来のものではないことを明らかにした。一方で、当地は縄文時代後期末から晚期以降にかけての活動の場として考えられることから、現状ではさまざまな問題点はあるものの、この貝層も当時の人为的作用による可能性を提示した。

はじめに

縄文時代後期・晚期は、東海地域において、遺跡の分布がある程度まとまって確認できる時期として、全国的にも注目される。しかし、東海地域内の各小地域において、遺跡の形成・分布は一律に同質的ではなく、それぞれ特性を有しつつ、各小地域間は有機的な関係を保持していたものと考えられる。従って、列島史的には渥美貝塚群に代表される貝塚のみがしばしば取り上げられるものの、近隣小地域の様相との比較・検討を、今後は大いに行なうべきである。

今回は、遺跡の分布状況が希少ではあるものの、着実に活動の痕跡が確認されつつある、尾張低地帯の遺跡について取り上げる。尾張低地帯は、現状では大小さまざまな流路を含む平坦な地形であるものの、発掘調査により、遺跡形成時の地形は、現状とは大きく異なり、かなりの起伏が存在していたことが明らかになりつつある。近年、弥生時代における濃尾平野の遺跡立地を考察した論考も発表されている（石黒 2004・2006）。

しかし、濃尾平野に展開する遺跡をすべて一括して提示しても、各遺跡の諸様相を埋没化させてしまう恐れがある。ここでは、まず、旧尾西市域周辺を取り上げていく。この地域は、木曽川が西側で接する地域であり、濃尾平野の奥部にあって、現状でも標高の低い地域である。

この区域で、どの段階から人が活動できるほどの安定した地盤が存在したかによって、縄文海進・海退の問題や、その後の河川堆積状況によって、現状からは確認しづらい、当時の活動の場が推定できるであろう。本稿では、不明な点が多い板倉遺跡を中心に取り上げることで、上記の問題を追究していく上での糸口としたい。

なお、「地質学的見地による板倉遺跡立地の検討」を鬼頭が、それ以外を川添が執筆した。

板倉遺跡について

現在、板倉遺跡に関しては、伊藤光夫のメモ（尾西資料館で保管）と、井関弘太郎の言及（井関 1981:33 頁）および『尾西市史』に記載があるのみである。井関および『尾西市史』の記載は、伊藤光夫のメモ（以下、伊藤メモとする）をもとにしているようで、伊藤メモとほぼ同じ内容である。これらの文章をもとに、遺跡の状況を概観する。

遺跡は、三条板倉地内（現在の一宮市三条字北平 47-1 ほか）に位置しており、付近の標高は約 6 m である。遺跡が発見されたのは、1968 年 3 月 11 日で、尾西市特水事業の下水管施設工事中に、地中から貝殻が出土したことが契機とされる。当時木曽川高校郷土クラブの伊藤光夫らによって発見されたもので、当時の一宮市史編纂委員会に連絡した後、3 月 20 日には名古屋大学考古学研究室の澄田正一による確

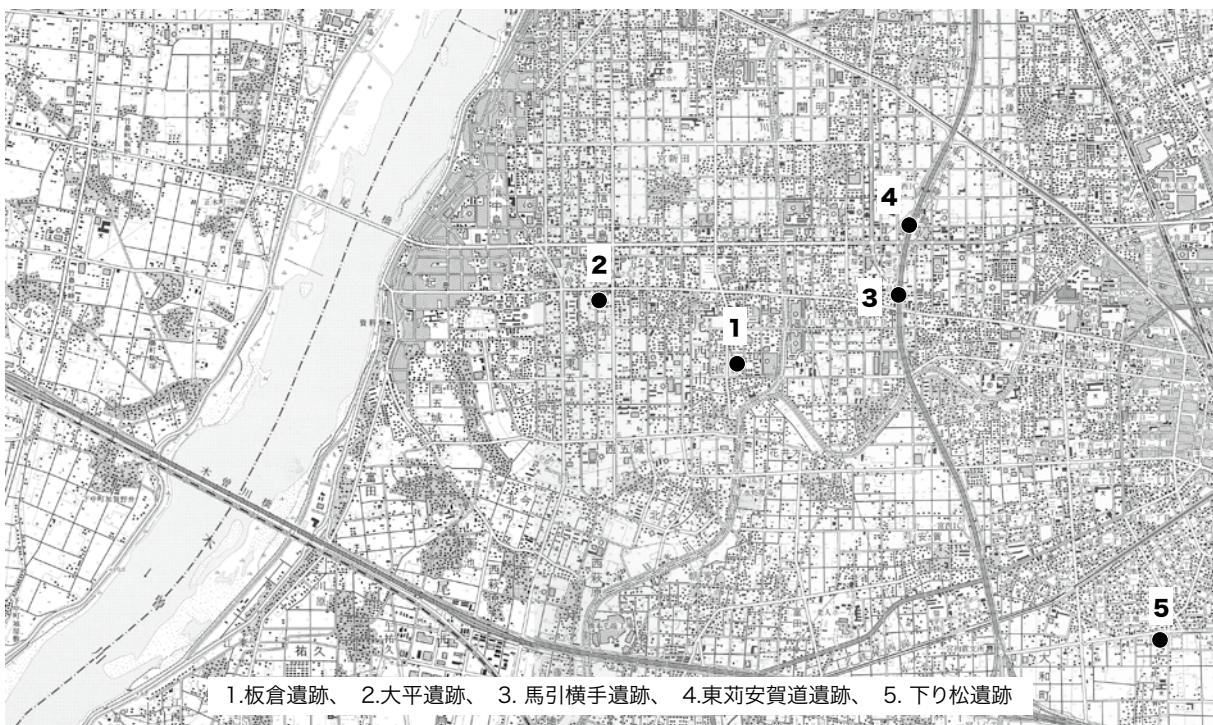


図1 遺跡位置図(国土地理院発行2万5千分の1地形図「一宮」「竹鼻」を1/2に縮小)

認のための現地調査が行われたようである。

伊藤メモには、当時の作業に当たった人夫の話を総合したとして、遺物出土状況の記載がある。それによると、不明確な点が多いとしながらも、表土層・粘土層の下に黒色有機土層が表れ、部分的にピット状の貝層が含まれ、以下は全部、砂層からなっていたとのことある。貝層及び黒色土層中より、土器・木の実・古木などを採集することができたようで、遺物包含層は地表下4~5mと推定されている。出土遺物は、土器・動物遺体・植物遺体があり、土器は縄文晩期、動物遺体では貝層の貝種としてカキ(マガキか?)・ハマグリが、植物遺体では木片・木の葉・種実(ドングリ・ヒシ・クルミなど)が出土し、クルミには人工の手が加えられたと思われるものも見つかっているとの記載もある。

貝層が発見されたということで、板倉貝塚という遺跡名で登録されたものの、この遺跡についての考古学側からの検討は、その後行なわれないままとなっている。一方で、それ以降、板倉遺跡については、自然地理学側からの言及が中心となった。井関弘太郎は、縄文後期・弥生後期の土器を含むとした板倉遺跡の存在に注目し、今日の海岸線から約30kmも離れた地点

で海棲貝種が出土している事実についての解釈を容易に出せないとしながらも、当遺跡が埋積浅谷底に位置していたということを、原賢仁の修士論文の研究成果として提示している(井関1981:33頁)。海津正倫は、板倉遺跡の立地する埋積浅谷を朝日遺跡で見つかった埋積浅谷同様に、縄文中期の小海退により下刻されたことにより形成され、縄文時代後期頃には、内湾最拡大期あるいは海進高頂期の旧海岸線付近における上部砂層の堆積がほぼ終了したとした(海津1988・1994:231~239頁)。縄文海進・海退に際する東北端の定点として取り上げられている。

現在、尾西資料館には、板倉遺跡関連の資料として、コンテナ一箱分の遺物が収蔵されている。内容は、土器40片程度のみである。土器は、縄文土器とS字口縁をもつ台付甕などの古式土師器が認められる。点数としては縄文土器の方が多いようだが、図化し得た分のみを掲載する(図2・写真1)。1は、深鉢口縁部で、波状を呈するものである。外面はLRを地文として、波頂部に向かってと口縁部・頸部境には、いわゆる半截竹管文*が施されており、波頂部下には

* 縄文時代後期末から晩期前半にみられる、いわゆる半截竹管文に関しては、原体の一部は巻貝工具による沈線文であることを提示した(川添2007)。なお、その内容は、『南山大学博物館オープンリサーチセンター2007年度年次報告書』に掲載予定である。

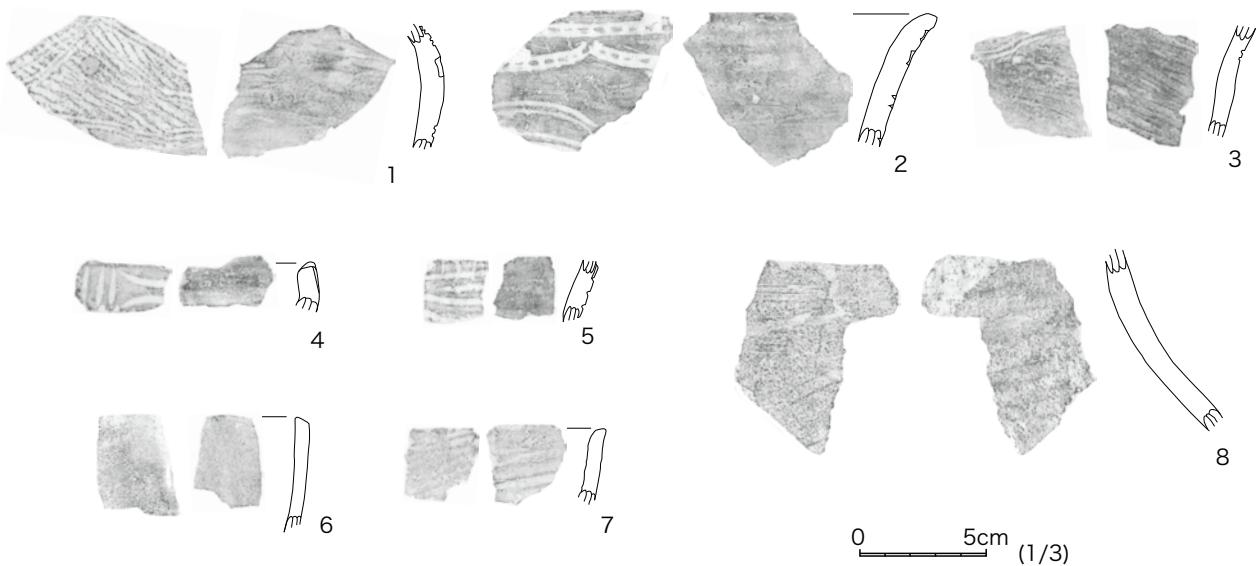


図2 板倉遺跡出土土器

巻貝殻頂側による刺突文が認められる。内面には横方向の巻貝条痕が確認できる。2は深鉢口縁部で、外面は最終調整ナデの上に、口縁端部側にはいわゆる半截竹管工具による押し引き沈線が直線と弧線の組み合わせで展開し、下方には同工具による沈線文が弧状に展開する。内面は巻貝条痕が認められる。3は深鉢の胴部片で、外面・内面ともに巻貝条痕が施されており、外面にはいわゆる半截竹管文が認められる。4はやや波状を呈する鉢類で、波頂下には三本の縦沈線、そして横方向に上下に弧状沈線が展開する。文様構成は八日市新保II式に類似するが、横方向の沈線が2本と1本少なく、かつ三叉文につながる縦沈線との連結も認められない特徴があり、時期が若干下るかもしれない。5も鉢類の胴部片で、平行する沈線内を刻むような縦方向の単沈線が連続し、その下に弧状沈線が3条横に展開する。外面・内面ともにナデ調整で、樞原文様の一種と考えられる。6～8は無文の土器片で深鉢と考えられる。6は外面・内面ともに最終調整はナデで、7・8は外面・内面ともに巻貝条痕が認められる。遺物は後期末から晩期初頭に属するものと考えられるが、多くは現在言われるところの下別所式に併行する一群かもしれない（増子2003）。

以上の遺物の状態は、器面および破断面の磨滅の度合いは低く、調整などの観察もほぼ良好に行なえ得る資料が多い。遺物から推測すると、

堆積後に二次堆積などの著しい移動を示す状況にはない。

また、板倉遺跡の近隣における縄文時代晩期の遺跡として、大平遺跡・東苑安道遺跡・馬引横手遺跡がある。大平遺跡で、灰層の検出を見たのは、当地が活動の場であったことを示唆するもので（伊藤和1990）、馬引横手遺跡（伊藤太1999）との関係を考慮する必要があろう。東苑安道遺跡では、遺物が二次堆積などの流れ込みの状況であったしながらも、遺物の時期などがまとまっており、ごく付近での活動^{*}が想定されよう。この遺跡では、土器以外に石鏃・打製石斧・磨製石斧の出土もあり、注目される（伊藤和1990・伊藤太1998）。板倉遺跡の場合も、出土状況に不明な点が多いものの、遺物に著しい磨滅は確認されず、活動の場が近くに存在していた可能性が考えられるのである。しかし、この遺跡に関しては、遺物の出土レベルが他の遺跡に比べると低い傾向にあり、このことは遺跡の性格を考える上で、重要な点となろう。いずれにしても旧尾西市三条から篠屋三丁目への東西に展開する区域は、縄文時代晩期には、人が活動しうる安定した地盤が広がっていたものと考えられ、それぞれ時期を異にした活動痕跡の結果を示している。

* 特に尾西市調査において流れ込みの状況と見える出土状況自体が、当時の活動痕跡の結果である可能性も否定できない。もしかしたら、愛知理文調査区側も同様の状況だったかもしれない。

地質学的見地による板倉遺跡立地の検討

板倉遺跡周辺における現在の地表面の起伏状況を把握するために表層地形解析を行なった。また地表下の状況を調べるために尾西市役所が実施したボーリングコア資料を入手してその層序を検討した。詳細を以下に記す。なお、本論で使用する地名については最近の市町村合併による地名の変更は考慮しておらず、旧地名で表記することをお断りしておく。

(1) 板倉遺跡周辺の等高線図

板倉遺跡周辺における現在の表層地形解析のため等高線図を作成し、地形表面の起伏状況を解析した。作成には愛知県一宮市発行の1/2,500「尾張西部（一宮）都市計画図」を用い、等高線間隔0.2mで等高線図を作成した。なお、等高線を描画するにあたり区画整理や道路建設に伴って盛り土あるいは掘削され、周りの標高値の分布傾向とくらべて明らかに調和しないとき、その標高値は採用しないものとした。

解析にあたってまず広範囲での地形の起伏状況を把握するために東西約6.0km、南北約4.0kmの等高線図を作成した。つぎに広範囲での起伏傾向が判明したのち、板倉貝塚周辺の東西約3.9km、南北約2.1kmのさらに詳細な等高線図を作成した（図3）。板倉遺跡は東海道本線尾張一宮駅から約3.3km西に位置し、遺跡からさらに西方約2.5kmには木曽川が南流する。伊勢湾にそそぐ木曽川の河口から約31.5km北に位置している。図1の等高線図全体では標高8.2mから標高4.0mまでの等高線が描かれ、東側で標高が高く、図の中央から南にかけて低くなる傾向がある。解析範囲内には低平ながらも尾根部と、谷部や閉曲線で囲まれた凹地がそれぞれ認められる。尾根について、まず図の中央付近に県道西萩原北方線ののびる方向に平行して、標高6.2～6.6mまでの南北方向（小信中島から東五城にかけて）に細長くのびる尾根部が認められる。尾根の長軸方向に直交する最大幅は約1.0km、最小幅は約0.2kmである。この尾根の東側縁辺部の、板倉貝塚から約0.8km北西の標高5.4m付近に縄文時代の大平遺跡が位置している（岩野, 2002）。

図の東側の大和町福森から萩原町花井方につけては標高6.0m以上の閉曲線で囲まれて孤立丘状を呈する凸地形の点在が認められる。

つぎに谷部について述べる。本論で示した図の範囲には取りきらず示されていないが、広範囲（東西約6.0km、南北約4.0km）の起伏を解析した図では東縁を深坪町から馬引まで、西縁を籠屋から板倉遺跡を通り東五城にいたる北東-南西方向に、谷の長軸方向の水平距離約4.7kmで長軸方向に直交する最大幅約1.2km、最小幅約0.4kmの大きな谷状の凹地が認められている。この谷状地形の東側にあたる馬引から北側にかけては東海北陸自動車道を谷の底としている。また、本論で示した図の西側には標高4.6～5.2mで東西約1.4km、南北約0.4kmの東西方向にのびる等高線の閉じた閉曲線からなる凹地が認められ、板倉遺跡はその凹地の中でもっとも低い標高値がみられる北東縁に位置している。等高線図のさらに西側には西縁を小信中島から起を通り、西五城、北今にいたる標高4.0～6.4mで北西から南東方向にのびる谷状の地形も認められる。

(2) 板倉遺跡周辺のボーリング資料

つぎに地表下の状況を調べるために板倉貝塚周辺で尾西市役所により調査された4地点のボーリング資料を手に入れた。それらを便宜的に西側から地点1、地点2、地点3、地点4とした（図3・図4）。地点ごとに層序の詳細を記す。

地点1は尾西市富田字橋詰において1987年（昭和62年）に尾西市立富田保育園の建設にともなう事前調査で実施されたものである。板倉遺跡からは約1.98km南西にある。ボーリング調査報告書には標高に関する記載がみられない。そこで愛知県一宮市発行の1/2,500「尾張西部（一宮）都市計画図」の該当地域の標高値を参考にして、地表面を標高4.6mとした（以下では標高に換算して標高値で記載し、他のボーリングコア資料でも同様に記載する）。下位層より標高-25.47～-23.07mは礫径5～20mmの円礫を主体とする中礫層である。標高-23.07～-15.06mは下部ではシルト質細粒砂層、上部で細粒砂層からなる。標高-15.06～-9.00mは砂質シルト層からなり、下部（標高-15.06～-13.60m）には少量の貝殻片および腐

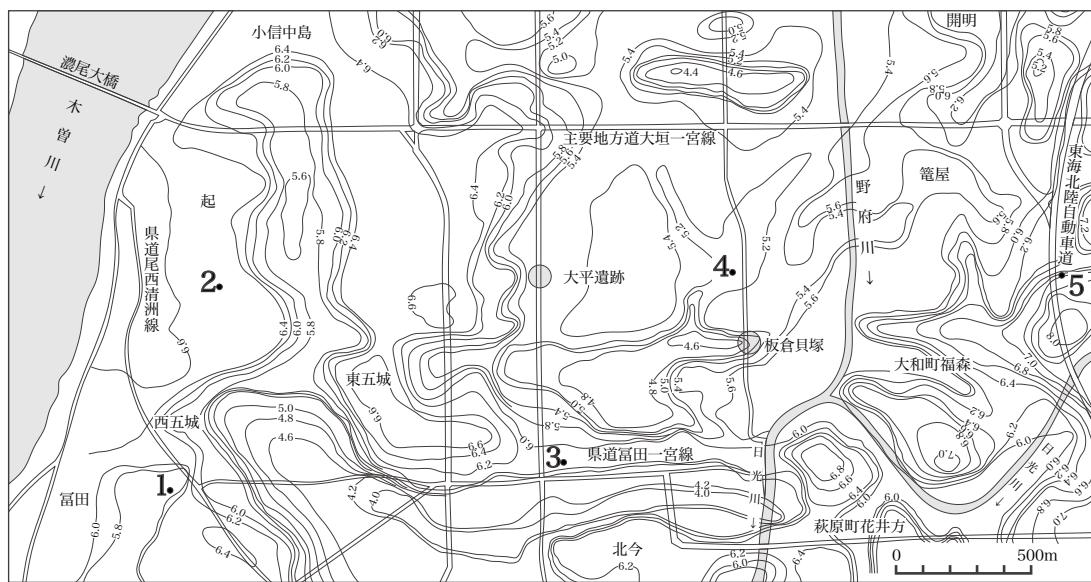


図3 板倉遺跡周辺の等高線図

数字1～4は尾西市による試錐地点、5は馬引横手遺跡を示す。

等高線(m)は愛知県一宮市発行の1/2,500「尾張西部(一宮)都市計画図」の標高値を基に0.2m間隔で作成。

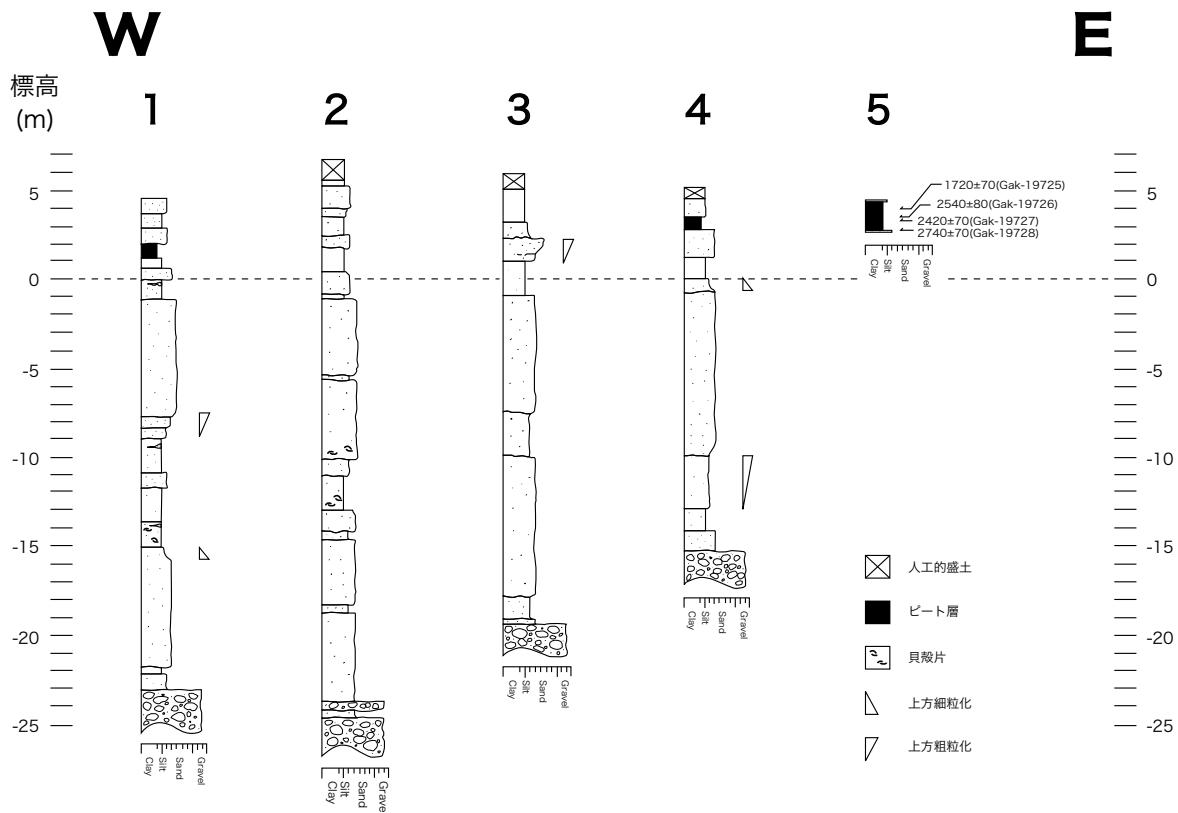


図4 板倉遺跡周辺の東西方向の層序断面図

数字1～4は尾西市(現一宮市)による試錐地点、5は馬引横手遺跡を示す。いずれも地点の位置は図1を参照のこと。地点5の馬引横手遺跡の数値は放射性炭素年代値を示す(鬼頭ほか, 1999)。各地点間の距離は均等に配置しており、実際の距離ではないことに注意。

植物が挟まれる。また標高 -11.73 ~ -10.87m には腐植物の混じるシルト質細粒砂を挟む。標高 -9.00 ~ -1.06m には層厚約 8m の厚い砂層が堆積する。標高 -1.06 ~ 1.27m は砂質シルト～シルト層で、標高 0 ~ 0.67m に細粒砂層を挟み、地層全体に腐植物が含まれる。標高 1.27 ~ 2.00m は暗黒灰色のピート層からなり、植物の纖維質が残る。標高 2.00 ~ 4.60m はシルト質細粒砂層からなる。

地点 2 は尾西市起字西生出において 1984 年（昭和 59 年）に尾西市立起小学校の建設にともない実施されたものである。板倉貝塚から約 1.95km 西にある。下位層より標高 -26.93 ~ -23.73m は礫径 5 ~ 30mm の円礫ないし亜円礫を主体とする中礫層である。標高 -24.80 ~ -24.40m には細粒砂層が挟まれる。標高 -23.73 ~ -12.93m は細粒砂層からなり、淘汰は良好である。まれに粗粒砂層が挟まれる層準もみられる。また、標高 -18.78 ~ -18.27m と標高 -14.66 ~ -14.41m にはシルト混じりの細粒砂層が挟まれる。標高 -12.93 ~ -11.06m は砂質シルト層である。砂は細粒砂を主体とし、本層下部には貝殻片を含む。標高 -11.06 ~ -10.13m はシルト質細粒砂層である。標高 -10.13 ~ -1.07m は淘汰良好な細粒砂層で、標高 -5.60 ~ -5.33m にはシルト質細粒砂層を挟む。また、標高 -10m 付近に貝殻片が混じる。標高 -1.07 ~ 4.00m まではシルト層ないし砂質シルト層とシルト質細粒砂層との互層からなり、標高 -0.80 ~ -3.60m には腐植物の混入する層準もみられる。標高 4.00 ~ 5.33m は褐色～淡青灰色を呈するシルト混じりの細粒砂層で、シルト成分が多い。標高 5.33 ~ 5.53m は褐色の砂質シルト層からなる。標高 5.53 ~ 6.80m は人工的な盛り土である。

地点 3 は尾西市三条字宮西において 1987 年（昭和 62 年）に尾西市立第一中学校屋内運動場および柔剣道場の建設にともない実施されたものである。板倉遺跡から約 0.80km 南西にある。下位層より標高 -21.06 ~ -19.30m は礫径 2 ~ 30mm の亜角礫を主体とする中礫層である。標高 -19.30m ~ -0.93m は細粒砂層を主体として、シルト質砂層を挟む。標高 -0.93 ~ 1.00m は暗黒色～暗灰色のシルト層ないしシルト質砂

層からなり、標高 0 ~ 1.0m には腐植物が混入する。標高 1.00 ~ 2.26m は細粒砂層からなり、上部に粗粒砂が混ざるようなる上方粗粒化傾向を示す。標高 2.26 ~ 3.20m はシルト質砂層であり、標高 3.20 ~ 5.06m は暗褐色～暗青色の腐植物の混じるシルト層である。標高 5.06 ~ 5.93m は人工的な盛り土である。

地点 4 は尾西市三条字苅において 1983 年（昭和 58 年）に尾西市立三条小学校の建設にともない実施されたものである。板倉貝塚から約 0.23km 北にある。下位層より標高 -17.13 ~ -15.13m は礫径 20 ~ 30mm の中礫層である。標高 -15.13 ~ -14.06m は細粒砂層であり、少量の腐植物を挟む。標高 -14.06 ~ -12.73m は砂質シルト層である。腐植物が混じる。標高 -12.73 ~ 0.13m は細粒砂層を主体とする。標高 0.13 ~ 1.33m はシルト層からなり、少量の腐植物を含む。標高 1.33 ~ 2.87m は淘汰良好な細粒砂層からなる。標高 2.87 ~ 3.60m は黒色のピート層である。標高 3.60 ~ 4.67m は褐色～暗灰色の砂質シルト層である。標高 4.67 ~ 5.33m は人工的な盛り土である。板倉遺跡の位置はこの地点 4 に近い。

板倉遺跡周辺の古地理環境の検討

（1）板倉遺跡周辺の堆積環境

表層地形解析の結果から板倉遺跡周辺の東西約 6.0km、南北約 4.0km の範囲には東縁を深坪町から馬引にかけて、西縁を篠屋から西五城にいたる最大幅約 1.2km の北東 - 南西方向にのびた長軸方向の水平距離約 4.6km の谷状地形が認められた。その谷状地形は板倉遺跡から西五城までを南西端としており、それはさらに小信中島から起、西五城、北今を結ぶ北西 - 南東方向の別の谷状地形に画される。この水平距離約 4.6km の谷状地形の位置は、現在の板倉遺跡周辺において北東から南西へ流れる日光川や北から南にむかう野府川の流下方向とは異なっている。とくに野府川は、表層地形解析により現れる起伏傾向とは斜交しており非調和的である。このような場合、のちの時代に古地形を横断する形で土地改変がなされたと考えられ、板倉遺跡形成の時代を考えるにあたり考慮する必

要はなくなる。日光川も、表層地形解析で現れた谷状地形からは南東方向にずれており、萩原町花井方で認められる標高4.0～6.0mまでの閉曲線で囲まれる凹地とは斜交し、非調和的である。日光川も解析範囲においてはのちの時代に改変された可能性がある。このように、板倉遺跡周辺における現在の表層地形解析結果をみると、現在その付近を流れる河川とは方向の異なる北東・南西方向の大きな谷状地形が認められ、板倉遺跡のある場所がその南東端にあたっている(図3)。なおかつ板倉遺跡から東五城にいたる範囲には標高4.6～5.2mで東西約1.4km、南北約0.4kmの東西方向に細長くのびる凹地が認められ、板倉遺跡はその北東縁に位置する。以上のことから、かつて板倉遺跡の北東方向には北東・南西方向に活動的河川流路があり、それが放棄されてのちに閉じた池状の止水環境ができ、その縁辺部で板倉遺跡を形成したヒトが活動をしていた可能性が考えられる。

つぎにボーリングコア資料をもとに地下層序について検討をする(図4)。ところで、自然地理学を専門とする井関(1975)、海津(1979)は沖積層中部泥層やその相当層の分布状況を濃尾平野の縄文海進時の古地理を考える上での根拠とした。沖積層中部泥層は地質学でいう完新統南陽層にあたる(古川, 1972; 松澤・嘉藤, 1954)。尾西市地域のボーリングコア資料では尾西市富田の地点1において、標高-15.06～-9.00mに少量の貝殻片を含む砂質シルト層が認められ、尾西市起の地点2では標高-12.93～-11.06mに砂質シルト層がみられた。本層が南陽層の中部粘土層にあたる。いっぽう、尾西市三条の地点3と地点4の地下層序には、地点1および地点2で砂質シルト層がみられた標高には砂層が卓越し、地点4の標高-14.06～-12.73mの砂質シルト層が中部粘土層にあたると思われるものの、両地点とも貝殻片を含むような典型的な中部粘土層に相当する堆積物は認められなかった。典型的な中部粘土層が認められない原因について、地点1・2と地点3・4との水平距離の間で中部粘土層がレンズ状に堆積し、ちょうど地点2から地点3までの間で中部粘土層がせん滅しているか、あるいは地点3や

地点4付近にも当初は中部粘土層が堆積していたにも関わらず、その後の砂層の堆積作用により削剥されて保存されなかつたことが推定される。しかし、地点1・2と地点3・4との堆積物の層相をみても明らかのように、地点3と地点4で標高0mよりも下位にみられる砂層の卓越は、砂層を運搬する当時、地点1や地点2に比べてかなり河川の影響がつよい環境におかれていたことを示すものである。

(2) 伊藤メモとの比較

つぎに板倉貝塚について述べた伊藤メモの記載について検討をする。伊藤メモの堆積物に関する記載では「地層に関しては直接見る事が出来ず、当工事に従事していた人夫の話を総合してみた」とあり、伊藤自身は地層を直接観察したわけではないことがわかる。伊藤はつづけて「それによると、表土層・粘土層の下に黒色有機土層が表れ、部分的にピット状の貝層が含まれ、以下は全部「砂層」から成っていたとの事。これらの話はいずれも不明確な点が多いのだが、全体に遺物包含層は地表下4～5mと思われる」と記載した。伊藤の記載の黒色有機土層に着目すれば、板倉貝塚に近いボーリングコア資料である地点4の地下層序をみると、標高2.87～3.60mに黒色のピート層が認められる(図1)。この黒色のピート層に関連して、板倉遺跡から約1.2km東の尾西市竈屋で発掘調査された馬引横手遺跡のデータがある(伊藤編, 1999)。馬引横手遺跡では標高2.78m～4.39mに黒色から褐色を呈する粘土層が確認されており、標高2.76～2.78mの砂層中から得られた木材から 2740 ± 70 yrs BP(Gak-19728)、標高3.32mの黒色腐植質粘土層の土壤が 2420 ± 70 yrs BP(Gak-19727)、標高3.56mの黒色粘土層の土壤が 2540 ± 80 yrs BP(Gak-19726)、標高3.98mの黒色粘土層の土壤が $1720 \pm$ yrs BP(Gak-19725)の放射性炭素年代を示した(鬼頭ほか, 1999)。板倉遺跡に近い地点4で認められる黒色のピート層は馬引横手遺跡で確認される黒色～褐色の粘土層と堆積物の層相が類似している。ここで注意が必要なのは、単純に堆積物の層相が似ているからといってまったく同一のものであると断言す

ることはできないが、少なくとも層相と分布標高の類似した地層が、馬引横手遺跡では現在から約2700年～1700年前までの放射性炭素年代を示した事実を参考とすることができる。この数値年代は伊藤メモにある遺物の所見で、縄文時代晚期～古墳時代にかけての土器がみられるとの考古学的な事実とも調和的であるのは興味深い。加えて伊藤メモには記載がないものの、板倉遺跡から出土した土器片を観察した筆者のひとり川添によれば、土器片群の中には縄文時代後期の遺物も含まれており、それらの表面には摩耗した痕跡がみられなかつたとのことであった。これは板倉遺跡の地点か、あるいは遺跡からそれほど遠くない場所での縄文時代後期のヒトの活動をうかがわせ、古環境を考える上でも重要である。

いっぽう、伊藤メモには遺物包含層が地表下4～5mにあるとの記載がある。現在の板倉遺跡の場所は表層地形解析で標高4.6～5.2mにあたっているため、伊藤メモに従えば、遺物包含層は標高0m付近の層準にあたることとなる。板倉遺跡に近い地点4の地下層序を参考にすれば標高0.13～1.33mはシルト層から構成されている。伊藤メモにある黒色有機土層が伊藤のいう遺物包含層にあたるとすれば、地点4の地下層序を参考とした場合、標高0m付近には黒色を呈するような堆積物の記載はみられない。加えて、伊藤メモには「貝類・貝層の大部分を占める「カキ・ハマグリ」は海水で生息する貝であり、おそらく、当時の海岸線がこの近くまで入っていたものと思われる」とある。このカキ・ハマグリなどの貝類に関しても地点4の地下層序を参考とすると、標高0m付近には貝類を産する記載はみられなかつた。

以上の事柄をまとめると、伊藤メモが遺物包含層ととらえる黒色有機土層について、その層相のみに着目すれば板倉遺跡周辺でも同様の粘土層が認められ、板倉遺跡から約1.2km東の馬引横手遺跡を参考にすると現在から約2700年～1700年前の数値年代が得られている。その値は伊藤メモの記載する縄文時代晚期～古墳時代にかけての遺物の出土という記載と調和する。いっぽう、遺物包含層が地表下4～5mにあるとする記載を基にすると、現在の板倉遺跡

付近の標高を考慮すると該当する地層は標高0m付近の地層であり、板倉遺跡に近い地点4のボーリングコア資料の地下層序には黒色を呈する有機物に富む堆積物の記載はなく、シルト層と細粒砂層が認められるだけである。伊藤メモの記載に従った場合、堆積物の層相の記載に着目するか、あるいは遺物包含層の深度に着目するかで、地下層序では層相の異なつた2種類の地層が該当してしまうという矛盾した結果を導くこととなる。このようなことが生じた背景には、堆積物の記載が観察に基づかず、掘削を担当した作業者からの聞き取りを基にしていることと、掘削され地表までまとまって掘りあげられる過程で、もっとも深い堆積物から地表にいたるまでのものが混在した堆積試料に対して検討を行っていることが原因であろう。

総括

以上のことから、今回の分析により、板倉遺跡に関して、次のことが明らかとなった

1. 出土遺物より、遺跡の形成時期の始まりは縄文時代後期末から晩期初頭が中心であると考えられる。遺物の状態などは良好であり、著しい磨滅なども認められることから、遺物自身の著しい移動はなかったものと考えられる。石器の出土は確認できないが、まずはここが当時の活動の場であったと想定することが可能であろう。

2. 以前から、当地域には、旧地形として、南西から北東方向にかけて大きな谷地形が存在していることがいわれている。板倉遺跡は谷に北接する地形の変換点付近に立地していたようである。

3. 板倉遺跡は厚い砂層を基盤層とし、この堆積物は、河川の影響によるものと考えられる。

4. 縄文海進を示す貝殻を含む中部粘土層の堆積は、板倉遺跡付近では認められない。中部粘土層は当遺跡の1.5km西側で、しかも堆積レベルは、標高-10m以下である。

特に、注目されることは、3および4である。板倉遺跡形成時には、当然ながら既に海岸線はやや離れた地点に位置していたものと考えられ

る。かつ、遺跡の立地する地点に中部粘土層は存在しない。このことから、板倉遺跡に貝層が存在していたとするならば、河川の影響による砂層を基盤とする上位に、カキ・ハマグリという鹹水性の貝層の堆積が認められたことになり、かつ鬼頭は遺物包含層の出土レベル自体に問題点を提示しているが、周囲で確認されている中部粘土層のレベルに比べていはずにしても著しく高いことは注目できよう。板倉遺跡における貝層の形成は、少なくとも縄文海進によるものではないようである。

現在、貝殻などの資料が存在せず、さまざまな問題点があるために、確実に人為的廃棄であると断言はできないものの、まずは人為的廃棄の可能性を想定する必要があろう。最近の調査によって近隣の稻沢市域では弥生時代前期の須ヶ谷遺跡（石黒編 2008）や、中期後葉の一色青海遺跡（蔭山編 1998）で、貝層を包含する土坑が報告されている。板倉遺跡の場合が、このような土坑内の貝層廃棄か、黒色土の一部は

貝層の腐植で、実際は貝層形成が顕著であったかは検証不能であるが、板倉遺跡の性格を考える上で、大きな手がかりとなるであろう。

いずれにしても、板倉遺跡のみならず、谷地形を挟んだ微高地上に立地する遺跡の展開状況を、今後、詳細に検討する必要があろう。

謝辞

本稿を起こすにあたり、以下の機関および方々からご教示・便宜を賜った。ここに感謝の意を表する次第である。（五十音順・敬称略）

伊藤和彦・伊藤光夫・岩野見司・長田友也・神田年浩・久保禎子・鈴木 元・土本典生・愛知県埋蔵文化財センターの諸氏・一宮市教育委員会

なお、図面の作成において前田弘子氏・村上志穂子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。



一宮市尾西歴史民俗資料館所蔵の板倉遺跡出土資料写真

川添関係文献

- 石黒立人,2004「弥生集落史の地平 その2—凹線紋系土器以前の弥生中期—」『研究紀要』5.15~28頁。愛知県埋蔵文化財センター。
- 石黒立人,2006「伊勢湾周辺地域における弥生時代の平野地形について」『研究紀要』7.33~45頁。愛知県埋蔵文化財センター。
- 井上吉貞,1968「大平遺跡発掘の思い出」『いのちのみや考古』2.3~5頁。一宮考古学会。
- 岩野見司,1970『新編 一宮市史 資料編一 繩文時代』一宮市。
- 井関弘太郎,1974「日本における2,000年前頃の海水準」『名古屋大学文学部論文集』LXII.名古屋大学文学部。
- 井関弘太郎,1981「第1章 自然」『新修 稲沢市史 研究編三 地理』1~67頁。新修稲沢市史編纂会事務局。
- 海津正倫,1988「濃尾平野における縄文海進以降の海水準変動と地形変化」『名古屋大学文学部論文集』CI.名古屋大学文学部。
- 海津正倫,1994「沖積低地の古環境学」東京 古今書院。
- 江崎 武,1965「濃尾平野における先史地理学的研究 特に後・晩期縄文遺跡の立地条件について」『いのちのみや考古』7.1~5頁。一宮考古学会。
- 川添和暁,2007「施査と調整からみた土器の検討」『南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター縄文部会シンポジウム 第1回山内清男縄文晩期研究と東海地方 資料集』南山大学人類学博物館。
- 北野信彦,1984「濃尾平野および西三河平野周辺における貝塚遺跡の立地について」『古代文化』36.6.15~25頁。財團法人 古代學協會。
- 増子康眞,2003「愛知県西部の縄文晩期前半土器型式の推移」『古代人』63.15~47頁。名古屋考古学会。

鬼頭関係文献

- 古川博恭,1972, 濃尾平野の沖積層 - 濃尾平野の研究, その1-, 地質学論集, 7, 39-59.
- 井関弘太郎, 1975, 第1章 自然・地形発達史を中心として, 新修稲沢市史 研究編三 (地理), 稲沢市, 1-67.
- 伊藤太佳彦, 1999, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第84集「馬引横手遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター, 99p.
- 鬼頭 剛・堀木真美子・尾崎和美, 1999, 馬引横手遺跡の古環境復元, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第84集「馬引横手遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター, 61-79.
- 岩野見司, 2002, 大平遺跡, 愛知県史 資料編1 考古1 旧石器・縄文, 愛知県, 74-75.
- 松澤 熊・嘉藤良次郎, 1954, 名古屋付近の地質, 同地質図, 愛知県, 35p.
- 海津正倫, 1979, 更新世末期以降における濃尾平野の地形発達過程, 地理評, 52, 199-208.
- 海津正倫, 1994, 沖積低地の古環境学, 古今書院, 270p.

報告書など

- 石黒立人,2008『須ヶ谷遺跡・西海塚遺跡・山王遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 伊藤和彦編,1990『大平遺跡発掘調査報告書』尾西市教育委員会。
- 伊藤和彦編,1997『東薊安賀道遺跡発掘調査報告書』(尾西市篠屋3丁目4番地内)尾西市教育委員会。
- 伊藤和彦・岩野見司ほか,1998『尾西市史 通史編 上巻』尾西市役所。
- 伊藤太佳彦,1998『東薊安賀道遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 伊藤太佳彦,1999『馬引横手遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 藤山誠一編,1998『一色青海遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 日野幸治・北條献示,1986『下津城跡発掘調査報告書(II)』稲沢市教育委員会。
- 日野幸治・北條献示・愛甲昇寛,1988『下津城跡発掘調査報告書(IV)』稲沢市教育委員会。

補遺

当初、筆者は、板倉遺跡の貝層に関して、否定的な見解をもって、分析を開始した。その根拠は、尾西郷土資料館に保管されている、板倉貝塚と記された(コンテナ箱横にカードが添付)、貝殻の存在である。貝殻は、極めて大型のマガキ・ハマグリが、一部は貝殻を合わせた形で保存されており、明らかに自然貝層由来の貝化石であることが分かるものである。

ところが、調査を行なっていくうちに、箱内に入っているメモの記載が、板倉遺跡とは異なる地点の出土を示していることが明らかとなつた(尾西市祐久字八間城)。このことから、この資料をもっては、板倉遺跡出土貝層を議論する材料にはできないと考えたのである。

しかし、なぜ、板倉遺跡出土の内容を示すカードがコンテナ横に添付されたのか、という疑問は残る。また、板倉遺跡出土の貝殻が別のものであるならば、それと種実などを、今回実見できなかつたのは、極めて残念なことである。

本稿における板倉遺跡についての見解は、現在検証しうる限られた資料のみに基づくものである。いずれにしても、今後は、旧谷地形付近の遺跡の状況を把握するために、各種調査を含めた、継続的な注意が必要となろう(川添和暁)。